

【D年】復活節第5主日(2024年4月28日)**【旧約聖書日課】エゼキエル書 36章24～28節**

24わたしはお前たちを国々の間から取り、すべての地から集め、お前たちの土地に導き入れる。
 25わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。わたしはお前たちを、すべての汚れとすべての偶像から清める。
 26わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。27また、わたしの霊をお前たちの中に置き、わたしの掟に従って歩ませ、わたしの裁きを守り行わせる。28お前たちは、わたしが先祖に与えた地に住むようになる。お前たちはわたしの民となりわたしはお前たちの神となる。

【使徒書日課】**ガラテヤの信徒への手紙 5章13～25節**

13兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。14律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。15だが、互いにかみ合い、共食いつているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。

16わたしが言いたいのは、こういうことです。霊の導きに従って歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。17肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し合っているのです。あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。18しかし、霊に導かれているのなら、あなたがたは、律法の下にはいません。19肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、20偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、21ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのもです。以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。22これに

対して、霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、23柔和、節制です。これらを禁じる掟はありません。24キリスト・イエスのものとなった人たちは、肉を欲情や欲望もろとも十字架につけてしまったのです。25わたしたちは、霊の導きに従って生きているなら、霊の導きに従ってまた前進しましょう。

【福音書日課】**ヨハネによる福音書 15章18～27節**

18「世があなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前にわたしを憎んでいたことを覚えなさい。
 19あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。20『僕は主人にまさりはしない』と、わたしが言った言葉を思い出しなさい。人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたをも迫害するだろう。わたしの言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。21しかし人々は、わたしの名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる。わたしをお遣わしになった方を知らないからである。22わたしが来て彼らに話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが、今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない。23わたしを憎む者は、わたしの父をも憎んでいる。24だれも行つたことのない業を、わたしが彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、その業を見たうえで、わたしとわたしの父を憎んでいる。25しかし、それは、『人々は理由もなく、わたしを憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。26わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。27あなたがたも、初めからわたしと一緒にいたのだから、証しをするのである。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エゼキエル書 36章24～28節

²⁴私は諸国の民の中からあなたがたを連れ出し、全地から集め、あなたがたの土地に導き入れる。²⁵私があるあなたがたの上に清い水を振りかけると、あなたがたは清められる。私はあなたがたを、すべての汚れとすべての偶像から清める。²⁶あなたがたに新しい心を与え、あなたがたの内に新しい霊を授ける。あなたがたの肉体から石の心を取り除き、肉の心を与える。²⁷私の霊をあなたがたの内に授け、私の掟に従って歩ませ、私の法を守り行わせる。²⁸あなたがたは、私があるあなたがたの先祖に与えた地に住む。あなたがたは私の民となり、私はあなたがたの神となる。

ガラテヤの信徒への手紙 5章13～25節

¹³きょうだいたち、あなたがたは自由へと召されたのです。ただ、この自由を、肉を満足させる機会とせず、愛をもって互いに仕えなさい。¹⁴なぜなら律法全体が、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句において全うされているからです。¹⁵互いにかみ合ったり、食い合ったりして、互いに減ぼされないように気をつけなさい。

¹⁶私は言います。霊によって歩みなさい。そうすれば、肉の欲望を満たすことは決してありません。¹⁷肉の望むことは霊に反し、霊の望むところは肉に反するからです。この二つは互いに対立し、そのため、あなたがたは自分のしたいと思うことができないのです。¹⁸霊に導かれているなら、あなたがたは、律法の下にはいません。¹⁹肉の行いは明白です。淫行、汚れ、放蕩、²⁰偶像礼拝、魔術、敵意、争い、嫉妬、怒り、利己心、分裂、分派、²¹妬み、泥酔、馬鹿騒ぎ〔別訳→酒宴〕、その他このたぐいのもので、以前も言ったように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。²²これに対し、霊の結ぶ実は、愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、²³柔和、節制

です。これらを否定する律法はありません。²⁴キリスト・イエスに属する者は、肉を情欲と欲望と共に十字架につけたのです。²⁵私たちは、霊によって生きているのですから、霊によってまた進もうではありませんか。

ヨハネによる福音書 15章18～27節

¹⁸「世があるあなたがたを憎むなら、あなたがたを憎む前に私を憎んだことを覚えておくがよい。¹⁹もしあなたがたが世から出た者であるなら、世はあなたがたを自分のものとして愛するだろう。だが、あなたがたは世から出た者ではない。私があるあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。²⁰『僕は主人にまさるものではない』と、私が言った言葉を思い出しなさい。人々が私を迫害したなら、あなたがたをも迫害するだろう。私の言葉を守ったのであれば、あなたがたの言葉をも守るだろう。²¹しかし人々は、私の名のゆえに、これらのことをみな、あなたがたにするようになる。私をお遣わしになった方を知らないからである。²²私が来て話さなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、彼らは自分の罪について弁解の余地がない。²³私を憎む者は、私の父をも憎む。²⁴誰も行ったことのない業を、私が彼らの間で行わなかったなら、彼らに罪はなかったであろう。だが今は、その業を見て、私と私の父を憎んでいる〔別訳→私と私の父を見て、憎んでいる〕。²⁵しかし、それは、『人々は理由もなく、私を憎んだ』と、彼らの律法に書いてある言葉が実現するためである。²⁶私が父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方が私について証しをなさるであろう。²⁷あなたがたも、初めから私と一緒にいたのだから、証しをするのである。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・4月28日「復活節第5主日」の日課主題は「聖霊の実」。「復活節」の七週間は「聖霊降臨日」に至って区切りとなるが、一連の「復活日」から「聖霊降臨日」に至る期節は、伝統的にはひとまとまりの「祭り」として祝われてきた。すなわち、「復活」の記念の中に、すでに「聖霊降臨」の予示と期待が含まれており、「聖霊降臨祭」はいわば「復活祭」を締めくくる「終祭」として位置づけられてきた。このような伝統から、「復活節」中には、すでに「聖霊」に関する聖書箇所が日課として設定されてきた。

・旧約聖書日課は、「エゼキエル書」から、新生されるイスラエルに対して「新しい霊」が授与されることを告げる箇所。使徒書日課は、「ガラテヤの信徒への手紙」から、「肉」と対比される「霊」の導きに従って生きる者のあり方を告げる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、御子昇天の後に「真理の霊」が遣わされることを告げる箇所。

旧約日課(エゼキエル 36章より)

・「エゼキエル書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第三に置かれた預言文書。南王国ユダ滅亡(前587年頃)の11年前から始まった「バビロン捕囚」でバビロンに移住した祭司集団の中で育ち、バビロンの地で祭司任職されて預言活動が続けた「預言者エゼキエル」の預言集として編纂されている。ネブカドネツアル王により退位させられ、「バビロン捕囚」第一陣としてバビロンに移送されたユダ王ヨヤキンの捕囚宮廷に仕える「宮廷預言者」であったと考えられる。「預言者エゼキエル」の預言は、滅びゆくユダ王国の問題が指導者たちの神に対する背任にあったと指弾し、神ご自身による「イスラエル」の養い手として「新しいダビデ」が立てられることを通して、死んでいた「イスラエル=神の民」が回復し、その象徴として「新しい神殿」が再建される幻を告げることへと展開している。その前提には、歴史的な「ユダ(王国)」と「イスラエル(王国)」を区別しながらも本来は一体のものであったとみなす「大イスラエル主義」の神学思想が据えられており、ヨシヤ王時代の改革によって国政に参与するようになり、その後の政治的混乱を経て、主にバビロン移住組として存続して「エレミヤ書」や「第二イザヤ」などを生み出した祭司・預言者集団の系譜に属すると考えられる。

・「霊(ルアハ)」は、旧約正典全体で広範に用いられる用語で、一般に神や人に属するが形姿を持たない精神や力など何らかの実体を指して、多くの場合に抽象的な意味合いで用いられる。他方、「エゼキエル書」での用法には独自の特徴があり、人の考えや行動を内的に支配し左右させる具体的な実態として「霊」が用いられる。そこで、誤りを犯す者が正されるためには「霊」が新たにされなければならない、となる。

使徒書日課(ガラテヤ 5章)

・「ガラテヤの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第四に置かれた書簡文書。パウロは、シリア・アンティオキア教会が派遣したバルナバ宣教団に参画し、キプロス島から中央アナトリア地方にかけて巡回した第一回宣教旅行で、ガラテヤ地方の諸教会形成に携わったと考えられる(使徒 14:6?)。「ガラテヤ」は、当時のローマ帝国行政区上のガラテヤ属州周辺の地方を指していると考えられる。「ガラテヤ」の呼称は、前3~1世紀に成立していた「ガラテヤ王国」に由来し、その名の通り「ガラテヤ人」が王国を構成していたが、彼らは元来「ガリア人」であり、ヨーロッパ・ガリア地方からの侵入者で、当時はローマ文化と融合した独自の文化を展開していたとされる。この地域にどの程度ユダヤ人が居住し会堂を形成していたかは不明であるが、異文化に対する受容的な態度は、バルナバ宣教団の宣教に対しても同様であったと推認される。本書簡でのパウロの筆の進め方から推察すると、この地域には会堂を中心とした確固としたユダヤ人共同体は確立していなかったのかもしれない。それゆえに、パウロらは、ユダヤ人社会の保持する諸習慣に遠慮することなく「異邦人伝道」を展開することができたのだろう。しかし、それは、ユダヤ会堂を中心としたユダヤ共同体に属するかどうかという葛藤を経ずに、「キリスト」によって「救いの共同体」に参入する道が開かれていたということであり、後々、ユダヤの伝統やそれによる葛藤を抱えたユダヤ人信者がエルサレムから来訪することによって、本書簡で問題にされるような葛藤が事後的に問題として生じたものと推察される。

・本書簡は、他のパウロ書簡と比較したとき、著しく書簡様式から逸脱しており、また文章構文に乱れや不適切表現が多く見られる。パウロは、結語(6:11以下)を除いて、本書簡を口述筆記させていることが確実であるが、上述の事情にも現れているように、本書簡での論理展開はときに破綻しており、パウロの神学思想を再構成する上では、慎重に扱う必要がある。取り上げている多くの主題が「ローマの信徒への手紙」でも扱われており、両書簡を同水準で扱って整合性を図る試みもされてきたが、かえって議論を行き詰まらせてきた。むしろ、慎重な筆致で展開している「ローマの信徒への手紙」を基軸としたうえで、パウロの宣教活動の経緯における「ガラテヤの諸教会の問題」の特殊性を理解する材料として、本書簡を取り扱うことが適当であろう。

・「肉(サルクス)」と「霊(プネウマ)」が対比的に扱われているが、これは、パウロに特有の用法である。「肉」と「霊」は、「肉体と精神」という二元論的人間観を示すために用いられているのではなく、「人」の言動が「人」自身に立脚している状態が「肉に導かれている」と表現され、「人」の言動が「神」に立脚している状態が「霊に導かれている」と表現される。そこにあるのは、内面的な葛藤ではなく、主体的な選択の問題である。

福音書日課(ヨハネ 15 章より)

・日課箇所は、主イエスが弟子たちと過ごした「最後の晩」に語られた一連の教えの一部で、「ぶどうの木のとえ」を用いてあらためて「愛の掟」を告げられた箇所が続く箇所。ここから、迫害と苦難に関連する言説が続き、17 章の「大祭司の祈り」に至る。

・読者は、この箇所から始まる迫害と苦難が、18 章以降で描かれる逮捕、裁判、死刑判決、十字架刑、死と葬りという一連の「受難」を指していることが自明である。しかし、「福音書」の物語展開上、迫害と苦難の話題は、唐突に始まる印象を拭えない。「最後の晩」の教えの中で、主イエスは弟子たちにご自分が去って行かれることは告げられるが、詳細を示そうとせず、時折りほのめかすばかりであった。ところが、ここで唐突に、「憎む(ミセオオ)」(18,19,23,25,26 節)という表現が繰り返される。「ヨハネ福音書」中で、「憎む」の用例は他に 3 例(7:7、12:25、17:14)ある。もちろん、「憎む」は、「愛する」の対義語として用いられており(19 節)、前段(11~17 節)で「愛の掟」が再提示されていたことを踏まえて、弟子たちの「互いに愛し合う」関係とは反対の「憎しみ」を向けられる関係が弟子たちに迫っていることを告げている、と理解すれば、必ずしも唐突な展開ということにはならないかもしれない。その際に着目すべきは 19 節「わたしがあなたがたを世から選び出した」という言説で、前段 16 節と類似の表現である。前段からの主イエスの言説は、「ぶどうの木」に譬えられる「主イエスと弟子たちの共同体」が、「世」という共同体から引き剥がされるようにして「選ばれ」て形成されているものであるがゆえに、「世」から「憎しみ」を向けられるのは必然であり、耐えるべきであるが、そこで閉じた「共同体」に引き籠るのではなく、「世」に「出かけて行って実を結び、その実が残るように」(16 節)するという主イエスの模範に倣った歩み始めることを促している。この派遣の契機として、「真理の霊」の授与が約束されている(26 節)

・この弟子たちを派遣する契機としての「真理の霊」の授与は、「復活顕現伝承説話」第二幕(20:19~29)でなされる告知、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」、「聖霊を受けなさい」によって伏線回収される。「派遣」の契機としての「聖霊授与」は、「ルカ文書」の場合と一致する。

来週の誕生日 (4 月 28 日~5 月 4 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-327 番「すべての民よ、よろこべ」(= I 151)は、19 世紀米国のユニテリアン派牧師ウェアの作詞。曲は、同じく米国の音楽家ジョン・グールドの曲からの編曲とされるが、詳細不明。
- ・21-51 番「愛するイエスよ」(I-19 番「みこえきくとて」)は、17 世紀ドイツの牧師クラウスニツァーの作詞で、各国で広く歌われている讃美歌。「説教の前

に」という原題が付されている。曲は、17 世紀ドイツの教会音楽家アーレの作曲で、最初はアドヴェントの独唱曲のために作られたが、後に出版された讃美歌集でクラウスニツァーの歌詞と組み合わせられた。

- ・21-476 番「あめなるよろこび」(= II 150 番)は C.ウェスレーの代表的な讃美歌の一つ。『讃美歌 21』で改訳されている。曲は、ドイツ生まれでアメリカで活躍した音楽家ザンデルの作。日本では別の曲(475 番 = I 352 番)との組み合わせで歌われてきたが、476 番の曲や別の曲が近年は標準になっている。

21-327「すべての民よ、よろこべ」

Lift your glad voices in triumph on high

1. Lift your glad voices in triumph on high, / For Jesus hath risen, and man can not die; / Vain were the terrors that gathered around him, / And short the dominion of death and the grave. / He burst from the fetters of darkness that bound him, / Resplendent in glory to live and to save. / Loud was the chorus of angels on high-- / The Saviour hath risen, and man shall not die.
2. Glory to God, in full anthems of joy: / The being he gave us, death can not destroy. / Sad were the life we must part with to-morrow, / If tears were our birthright, and death were our end; / But Jesus hath cheered the dark valley of sorrow, / And bade us, immortal, to heaven ascend. / Lift, then, your voices in triumph on high, / Jesus hath risen, and man shall not die.

21-51「愛するイエスよ」

Liebster Jesu, wir sind hier, dich und dein wort

1. Liebster Jesu, wir sind hier, / Dich und Dein Wort anzuhören; / lenke Sinnen und Begier / hin auf Dich und Deine Lehren, / dass die Herzen von der Erden / ganz zu Dir gezogen werden.
2. Unser Wissen und Verstand / ist mit Finsternis verhüllt, / wo nicht Deines Geistes Hand / uns mit hellem Licht erfüllet; / Gutes denken, tun und dichten / musst Du selbst in uns verrichten.
3. O Du Glanz der Herrlichkeit, / Licht vom Licht, aus Gott geboren, / mach uns allesamt bereit, / öffne Herzen, Mund und Ohren; / unser Bitten, Flehn und Singen / lass, Herr Jesu, wohl gelingen.

21-476「あめなるよろこび」

Love Divine, All Loves Excelling

1. Love divine, all loves excelling, / Joy of heaven to earth come down; / Fix in us thy humble dwelling; / All thy faithful mercies crown! / Jesus, Thou art all compassion, / Pure unbounded love Thou art; / Visit us with Thy salvation; / Enter every trembling heart.
2. Breathe, O breathe Thy loving Spirit, / Into every troubled breast! / Let us all in Thee inherit; / Let us find that second rest. / Take away our bent to sinning; / Alpha and Omega be; / End of faith, as its Beginning, / Set our hearts at liberty.
3. Come, Almighty to deliver, / Let us all Thy life receive; / Suddenly return and never, / Never more Thy temples leave. / Thee we would be always blessing, / Serve Thee as Thy hosts above, / Pray and praise Thee without ceasing, / Glory in Thy perfect love.
4. Finish, then, Thy new creation; / Pure and spotless let us be. / Let us see Thy great salvation / Perfectly restored in Thee; / Changed from glory into glory, / Till in heaven we take our place, / Till we cast our crowns before Thee, / Lost in wonder, love, and praise.